

仕事を選ぶこと

金子 直樹

「現役では、なかなか受からない。」

何度、聞かされたか分かりません。この言葉を聞いて、いったいどのくらいの人が「現役で合格するぞ!」と思えるのでしょうか。

私は、教職課程を2年生から履修しました。教師を目指そうと思い始めたのは、3年生の終わり頃でした。当時、私は課外活動に取り組み、家に帰るのは夜の12時を過ぎることもありました。ある日、父は私に「お前、就活どないするねん。」と言いました。その頃に私には、就きたい仕事はなく、曖昧な返事しかできませんでした。

「教師になりたいと思うこと。」と「教師になろうと考えること。」には、大きな差があると私は思います。「教員免許は取れそうだし……。」「公務員だし……。」など、当時、教師という仕事は、教職課程を履修していた私にとって、あまり深く考えずに目指せる仕事であり、出来ればなりたいたいという程度でした。私のように、まず自分の興味がある仕事や、できそうかなと考えることは、ごく自然なことだと思います。私は、教職に限らず進路は考えているけれど、決定的な理由に悩んでいる人には「安心してください。大丈夫ですよ。」と言いたい。興味を持つことに、立派な理由は要らないと私は思います。

採用試験を受けるときにも、北海道から沖縄までの自治体の教育理念を見比べたりはしませんでした。特別な理由がない限り、自分が生まれ育った地域の子どもたちを教えたいと思うのが自然だと私は思います。では、私はいつ本気で教師になることを考えたのか。それは、自分はこんな教師になろう!と考えたときです。

私は大学に入って初めて勉強が楽しいものだと思えるようになりました。それまでの「勉強」は何かを丸覚えするような、言わば修行のようなものでした。「勉強とは、何か大切な経験をすることだ。」と恩師の先生は仰っていました。私は大学での授業だけでなく、課外活動やボランティアなどで多くの「勉強」をしてきました。大学での人と人との出会いが私を大きく変えました。しかし、大学で勉強の楽しさを知ったのは、遅すぎると感じました。そのため、中学生や高校生の子どもたちに勉強だけでなく、生活のあらゆる場で「楽しい」という心を伝えられる先生になろうと思いました。これが、私の教師を目指すきっかけのひとつです。

とにかく自分のベストを尽くして臨んだ採用試験。まさか、自分が1次試験を通過するとは思ってもみませんでした。それからは、2次試験に向けての論作文や模擬授業を対策しました。大学の教室を借り、ひとりでエアー授業をし、ビデオに撮った自分の授業を見返して対策しました。試験当日は練習の甲斐あって、試験官の先生に「学生にしては、堂々とした授業ですね。」と言ってもらえたことを覚えています。

そして、私は本当に運良く、神戸市の採用試験に合格することができました。合格通知

を母に見せると、私よりも喜んでくれました。母だけではなく、恩師の先生方や友人などたくさんの方々が「おめでとう。」と言ってくれました。私は自分の周りの人々がこんなにも喜んでくれる経験を他にしたことがありません。そのとき、私は生まれて初めて努力は自分だけのものではないと知りました。

今、私は勉強を続けています。教師として力不足であることや期待より不安が大きいと感じているからです。しかし、緊張ばかりしていても始まりません。これからも楽しく頑張っていきたいと思います。